

2020 年度



## Globe 実践をふり返って

東川第三小学校

### 今年度の重点

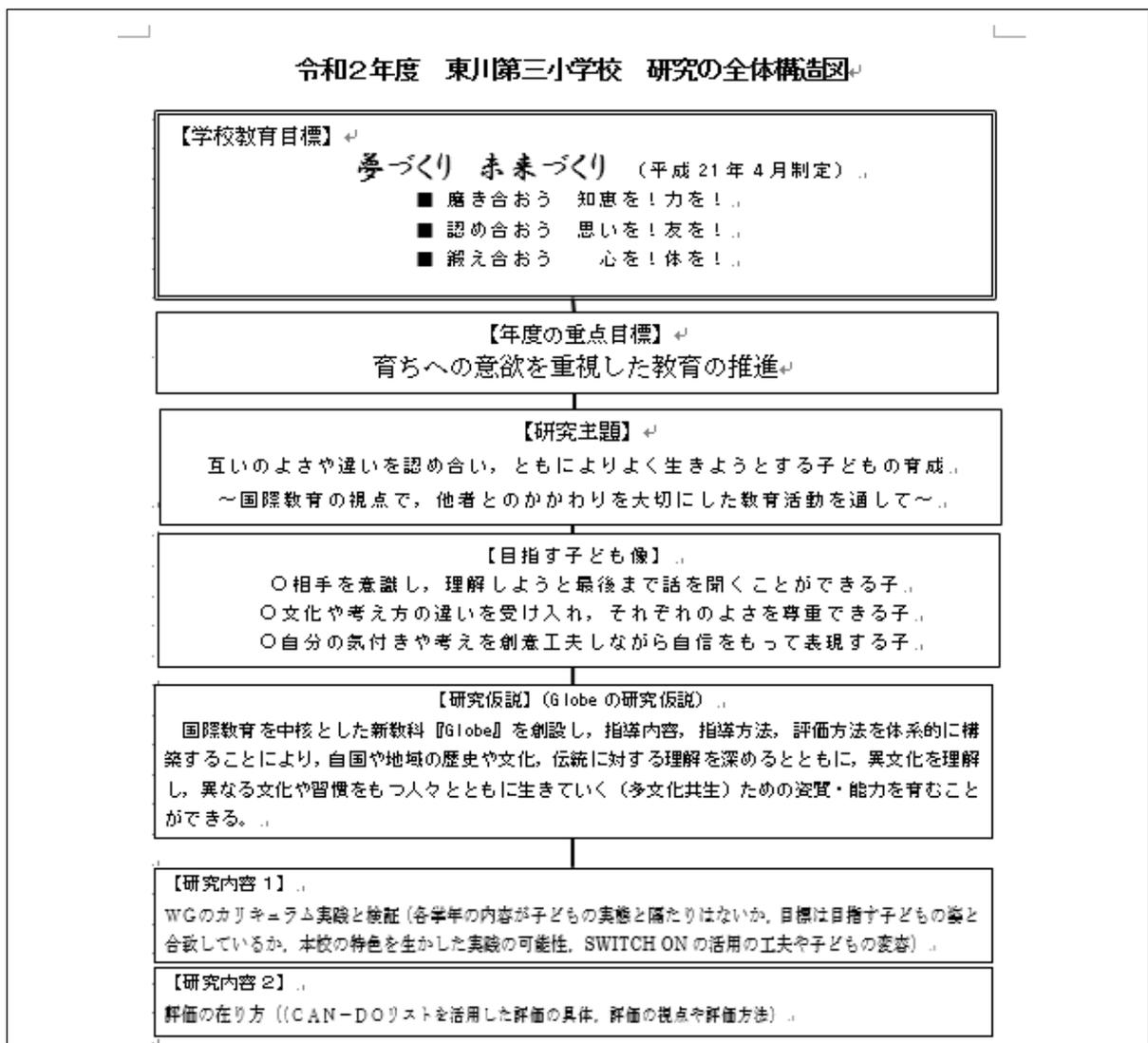
#### 1 カリキュラムの見直し

- (1) Globe 授業にかかわる指導方法、評価方法の充実
- (2) Communication 要素の評価 (CAN-DO リスト) の充実

#### 2 国際教育の接続について

- (1) Local/Global 要素の系統性の確立
- (2) 教科横断的指導の充実

上記の重点を受けて、本校では校内推進プランを進めてきた。



## 1. カリキュラムの見直し

### (1) Globe 授業にかかわる指導方法、評価方法の充実

#### 【小規模校の特色を生かした指導方法】

本校では、毎週 Globe の打ち合わせ日を設定し、担任などの指導者と A L T が協力して授業づくりを進めている。打ち合わせの際には、前時だけでなく前年度の子どもの様子や反省も活かして計画を立てて実践し、反省を次時につなげていくというシステムができている。

各学年の児童は 2～5 名で、授業時間内の児童一人当たりの発話は多く、H R T（兼 J T E）、A L T そして S T E が同時に指導や支援を行うことができ、児童対指導者がほぼマンツーマンの授業体制を組むことが可能である。さらに、子どもたち一人一人へのきめ細やかな指導及び評価を行うことができる。

課題は、同学年の友達同士の会話やインタビューといったコミュニケーション活動はマンネリ化し、すぐに終わってしまうという点である。また、カリキュラムを作成する際に想定されていたジャンケンやフルーツバスケットなどのアクティビティができないことやアクティビティの選択肢が限られるということもある。

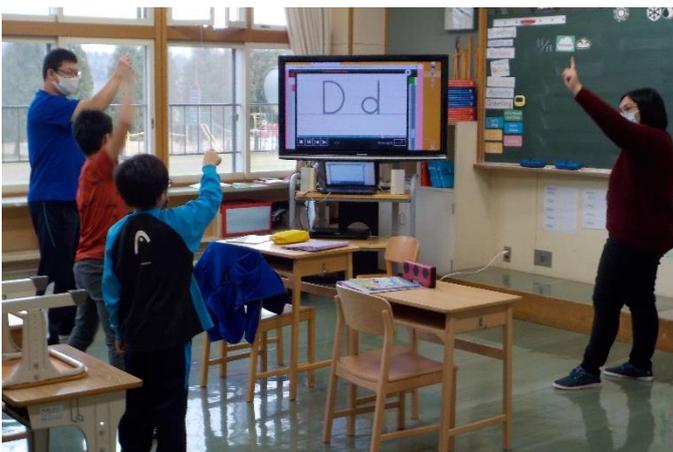
「SWITCH ON」は、そうした Globe 授業の課題を解決することができる教材として、本校では継続して活用している。日常生活の一場面を切り取ったストーリーや歌、フォニックスなどは楽しく、1～4 年生では授業のウォーミングアップとしてだけでなく、出てきたフレーズを発表の場面でも活用しようと試みた。また、高学年は学習したフォニックスのルールを使って SWITCH ON の Reading を行うなど、各学年ごとに工夫して授業の中に取り入れてきた。

SWITCH ON を 2 年間継続して活用してきた児童は、確実に英語に慣れており、発音もよくなり、新しい単語を耳にしても聞き取ることができるようになったと感じる。特に今年度は、子ども達に役割を与えて、聞き取りを重視したり、口の動きに着目させたり、発表の場で使えるフレーズを想起させたりするなど工夫し、授業の中に確実に SWITCH ON を位置づけた授業スタイルを確立することができた。

単元作りにおいては、CAN-DO リストをもとに、子ども達につけたい力を具体化し、伝えることをゴールとした単元構成を行ってきた。



◆児童 4 名に対し、H R T、A L T、J T E が指導にあたる 2 年生の授業環境。手厚い指導ができる。



◆SWITCH ON の中で Writing Activity を行う 3 年生。書き方を体全体を使って覚える。

## 【評価の在り方】

今年度は、次の2点について研修してきた。1つ目は「主体的に学習に取り組む態度」をどのように評価するのか、2つ目は、ルーブリックを活用したコミュニケーションの評価である。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、「知識および技能を獲得したり、思考力・判断力・表現力などを身に付けたりすることに  
向けた粘り強い取り組みの中で、自らの学習を調整しようとしているかどうかを含めて評価する」（文科省 児童生徒の学習評価の在り方について 概要より）とされており、どの場面で、どのような子どもの姿を想定し見取るのがよいのか考え、授業の中で具体化しようと試みた。

	4	3	2	1
やりとり	目線を合わせながらあいづちなどのリアクションをしたり、質問したり質問の内容に答えている。	目線が合う、もしくはリアクションをとっている。	相手と目線を合わせず、リアクションもしない。	目線を合わせず、リアクションをとらず、他のことをしている。
発表内容	行ってみたいおすすめの国や地域とその理由を述べたことや友達との交流をもとに分かりやすく説明することができる。	行ってみたいおすすめの国や地域と、その理由を述べたことや友達との交流をもとに説明することができる。	行ってみたいおすすめの国や地域を伝えることができる。	発表する内容を把握していない、発表しない。
発表態度	スマイル、クリアボイスを意識し、聞く人の反応を見ながら目線をもつて伝えている。	スマイル、クリアボイスを意識し、伝えている。	スマイル、またはクリアボイスをしている。	発表の内容が伝わりにくい。

◆6年生の発表ややり取り（話すこと）を評価するために作成したルーブリック表。評価規準は CAN-DO リストをもとにした。

ルーブリックを活用した評価については、高学年のプレゼンテーションにおいて試みている。CAN-DO リストの「やりとり」と「話すこと」の内容をもとに評価の基準を作成し実施したところ、6年生は全員が最も良い評価となって表れた。しかし、5年生において「話すこと」で CAN-DO リストをもとに同じルーブリック表を用いて評価しようとする

ると、「4」となる児童はほとんどいなく、異なる結果となった。発表内容以外の観点では、学年によって目指す姿を具体化してルーブリック表を作成する必要がある。

## 2. 国際教育の接続について

### 【教科横断的指導の充実】

今年度は、1年生と2年生における生活科との関連に焦点を当て、実践と検証をした。Globe 別葉をもとに、1年生の Globe7「オータム」では、生活科の「あきとももだちになろう」で三小の自然についてゲストティーチャーから学び、見つけた秋の物を Globe で発表する実践を行った。2年生の Globe5「できることをしようかしよう」では、生活科の「つくってためして」で作成したおもちゃを使って他国の方と交流する実践を行った。



◆ゲストティーチャーから秋の自然について学ぶ生活科の様子



◆生活科の秋たんけんで見つけたものを Globe7「オータム」で発表。使ったフレーズは、ALT に教えてもらった”In Autumn I see, ○○.”を自己紹介に追加して発表した。



◆三小の森で見つけた秋の自然について発表した三小 EXPO。2年生は松ぼっくりや木の葉を取り入れて生活科「つくってためして」のおもちゃ作りを行った。



◆生活科で作ったおもちゃ使って他国の方と交流した2年生の Globe「できることを伝えよう聞いてみよう」。“Can you〜?”を使って自分から積極的に話しかけることができた。

### 【地域人材の活用と子ども達の様子】

今年度は、日本語学校との交流ができなかったが、文化交流課にお願いし C I R や S E A に協力いただいて授業を行った。子ども達は、単元のゴールで他国の方に発表をしたり、交流したり、教えてもらう活動を楽しみにしており、授業へ向かう姿勢も意欲的になっていることが感じられた。

他国の文化にふれ、他国の方を身近に感じられる Globe の学習は、子ども達のグローバル【G】な力を伸ばすことができている。Globe の学習の継続によって、コミュニケーション【C】の技能も高まってきた。今後は、ローカル【L】の視点を強められる単元づくりや活動を工夫することによって、目指す子ども像に近づけられるのではないかと考える。



◆C I R に自己紹介をした後、それぞれの国のものについて教えてもらった2年生。わからないものや教えてもらいたい物は“What's this?”と聞くことができた。



◆4年生の Globe 7 で東川の食材を使ったおすすめの給食メニューをゲストに紹介。その後ゲストの国の給食について教えていただき、国によって給食が異なることを学んだ。

### 3. 今年度の成果と課題

#### 【成果】

- Globe のカリキュラムに沿った実践と検証の蓄積ができた。
- 本校の特色を生かしながら指導方法や単元構成を工夫・改善することができた。
- SWITCH ON の継続活用により、児童が英語をよく聞き取れるようになってきた。他国の方の言葉を聞き取り、即時に返答することができた。
- 本校の特色を生かした授業の流れやシステムが確立されてきた。
- 交流したり発表したりする場面では、1 単位時間の目標を吟味し録画することで、児童の変容が見られる場面が明確となり、評価が容易になった。
- 児童のアンケートより、「Globe の授業が楽しい」「外国の人といっぱいしゃべれるようになった」など意欲的な児童が多くなった。

#### 【課題】

- カリキュラムの実践では、特に 5 年生の内容と時数とのバランスが難しく、児童の意欲が低下する傾向にあった。5 年生の学習が急に難しくなる、書くことが多くてついていけない、出てくる単語が多い、と感じている児童が多かった。
- CAN-DO リストをもとにループリック表を作成したが、その評価項目の妥当性は今後検証が必要と言える。
- 授業の流れやシステムが確立されつつあり、児童はある一定レベルの外国語を聞いたり話したりする技能を身に付けることができた段階にあるが、Globe の目指す子ども像に対する達成度をどのように図ったらよいか分からない。
- 自己紹介や発表の仕方など、英語での模範を示して指導してきた。それらが一人一人が身に付けたことを学び合うことができるような指導方法の工夫をする必要がある。
- Local/Global 要素の系統性について検証する必要がある。Local の視点をやや強化する必要性を感じる。